
闇

七英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇

【ZPDF】

N7784A

【作者名】

七英雄

【あらすじ】

時間・場所別々に突然死んでいく男女。だが全員が細い線で繋がっていた。その法則に科学では証明できない恐ろしい「何か」が動いていた。全30回の不思議な世界。

第1回 ミカ

ミカは暗い夜道を一人で家路についていた。

いつもの薄気味悪い道ではあるが毎日通っている。

そもそもこんな夜中に一人で道を歩くつもりはなかった。

恋人の家で甘い時間を過ごすはずだったのだ。

浮気の疑惑が発覚したので、そのことを追及した。

たまたま何気なく（この時点で確信犯ではあるが）触った携帯電話に知らない女の名前を見たからだ。

当然ながら、恋人はそんなことを認めるわけはなく、浮気している、してないの口論となつた。

怒りのあまりミカは恋人の家を飛び出した。

送つてもくれない恋人に心中で悪態をつきながらの帰り道。

絶対に浮気している。

盗み見た手帳にも携帯とは他の女の名前を見たのだ。

間違いない。

複数の女と浮気している。

明日再度追求してやるつ。

手帳を奪つてやるつ。

そして、女の名前を突きつけてやるのだ。

ふと気づくと、ミカの足音とは別の音が聞こえる。

ハイヒールのコシン・コシンという音ではなく、ズズツ、ズズツと足の裏全体で擦り寄つてきているような音。

明らかに後を尾いてきている。

その音はまるでミカの動きに合わせているかのよう、正確に、ミ

カの足音と同時に必ず向こうの足音が出る。

「嫌だ、変質者？」

怯えながらも、足音が続くよりあれば怒鳴つてやうと決めた。

今日の私は機嫌が悪いのだ。

過去にも痴漢の男を怒鳴り声だけで撃退したことがある。

今なら過去最高の声が出そうだ。

後ろの「誰か」はいなくなる気配はない。

苛立つたミカは堪りかねて心の準備をした。

そして、振り返った。

口から出たのは怒鳴り声ではなく、叫び声だった。

この瞬間、ミカの足音は永遠に止まってしまうことになった。

つづく

第2回 キヨミ

今日はキヨミの誕生日。

大好きなパパがキヨミの欲しかったぬいぐるみをプレゼントとして
買っててくれる。

前からおもちゃ屋さんを通る度に欲しかった物だ。

ショーケースの前にへばりついて、怒られて引っ張られるまでみて
いたぬいぐるみ。

キヨミは欲しいとは何も言わなかつたが、パパしっかりと見てくれ
ていた。

誕生日になると、パパが「キヨミはあのぬいぐるみだらう。」と
言つてくれた。

とても嬉しかつた。

ちゃんとキヨミのことを理解してくれている。

キヨミのことをわかつてくれている。

キヨミが欲しい物は、なんでもわかつているんだ。

キヨミは今日で5歳になる。

早くパパ帰つてこないかな。

待ちきれなくてキヨミはそわそわと家中を動き回つた。

「キヨミ、静かにしなさい」

遠くで声が聞こえる。

ママは台所で誕生日に出す「駆走」を作つてゐる。

きっと大好物のハンバーグだ。

パパの帰りが待ち遠しい。

みんなで一緒に早く駆走食べたいな。

キヨミは窓の外を見る。・・?

何かが家の前に立つてゐる。

パパかな？

いや・でも様子が変だ。

違う人だ。

黒い何かが・・物・・人だ。

「誰か」が立っている。

キヨミは「誰か」をじっと見る。

変な気分になった。

嫌いなピーマンを残すことができずに無理矢理口の中に押し込んだ

ような。

押し込まれたような。

吐き気のする気分だ。

瞬間「誰か」の顔が動いてキヨミと目が合った。

ドス黒い視線がキヨミの瞳に入ってきた。

キヨミの誕生日は同時に命日となつた。

つづく

第3回 リュウジ

今日も奴を殴つてしまつた。

あれだけ言つたのにも関わらず・・だ。

金を持つてこない奴が悪い。

決められた金額を持つてこないからだ。

奴はちゃんと返事したんだ。

明日には持つてくると言つたんだ。

間違いなく持つてくると言つたんだ。

ならば返事の責任は奴にある。

嫌なら最初から断ればいいんだ。

俺がどんなに奴に凄んでも、どんなに脅しをかけても。

たつたひとつ簡単なことだ。

嫌なら。

断ればいいんだ。

リュウジは自分のしていることを無理矢理正当化させていた。
教室で一人イライラしている。

金を持つてこないと、俺が上に怒られるのだ。

今日がそのリミットだ。

金を納めないとこっちが半殺しの目にあつてしまつ。

金が足りない。

だから、奴の金がなければアウトなんだ。

あの野郎・・。

なんで持つてこないんだ。

リュウジは舌打ちした。

簡単だう。

金を作るのくらい。

親に頼めば貸してくれたりできるだらうが。

それでも駄目なら盗んででも持つてくれればいいんだ。

まあいい。

また持つてこなければ殴るだけだ。

今度は金額も倍にしてな。

下校中。

リュウジの携帯電話が鳴る。

今まで一度も設定したことのない着信音だつた。
着信を見ると奴からだ。

金の用意が出来たのか。

待たせやがつて。

遅すぎるぞ。

疑うことなくリュウジは電話に出た。

何かを喋ろうとしたその時。

顔面が蒼白になる。

意識が飛ぶ。

同時に電話機を地面に落とした。

リュウジの携帯電話は一度と本人の手に帰ることはなかった。

つづく。

第4回 ユキエ

ユキエが家に帰ると部屋の中は真っ暗だった。
虚しさという言葉が重く部屋の中に落ちている。

静かだ。

静かすぎる。

ついこの前までは幸せだったはずなのに。
幸せな将来のことまで考えていたのに。

同棲相手の男が出て行つたのだ。

男の方が浮気をして、大喧嘩したからだ。
何の落ち度があるのだ？

ユキエは思う。

自分に女としての魅力がなくなつたのか。

それでも、他の女へはしつた男に怒りを覚える。

謝つてきても許すつもりはなかつたのだが、謝るビールが簡単に出て行つた。

それはそれで悔しい思いを感じる。

どうせあの子と仲良くやるのだろう。

好きにすれば良い。

私は私の人生を進んでいくだけだ。

心に誓い、冷蔵庫から冷えたビールを取り出し、飲もうとした。

その時。

ザワツ。

悪寒が走つた。

髪を洗つてゐる時に、後ろに誰かいる気配を感じるアレである。
同じ感覚にとらわれた。

何かの気配を感じる。

それはバスルームの中から感じた。

ユキエは寒気を覚えた。

身体が危険信号を発していた。

しかし、確かめずにいられない。

バスルームへと近づく。

距離が縮まるにつれ、心臓の鼓動が速くなる。

嫌な予感がする。

だが、止まらない。

止まりたくても勝手に身体が動いているのだ。

引き寄せられるように足が動く。

いなくなつた男への助けを思いながらドアに手をかけて、開けた。

目の前が一瞬暗くなつたかと思つと、その暗闇はユキエにとって永遠の闇であることがわかつた。

わかつた時には。

既に。

遅すぎた。

つづく。

第5回 カズユキ

仕事がようやく終わってカズユキは背伸びをした。
急いで帰らなくては。

今日は5歳になる娘の誕生日だ。

手には欲しがっていたシリーズ物のぬいぐるみ。

毎日店の前で物欲しそうに眺めていた。

何が欲しいかと思えば、簡単にわかるほど のリアクションだ。
1万円もした。

キャラクター商品だ。

最近の玩具はこんなに高いのか。

心の中で舌打ちするも、娘の喜ぶ顔を思い浮かべると、どうでもよくなつてくる。

仕事のストレス発散をどうするのか、よく聞かれる。
まわりは買い物だとか、パチンコだとか、色々だ。

カズユキの発散は子供の顔を見ること。

娘の笑顔を見ているだけで、無邪気な会話を聞いてるだけで。
それだけで一日の疲れが消える。

カズユキは車に乗り込み、発進させた。

10分くらいしただろうか。

後部座席に違和感を覚える。

何か異様な物の存在。

暗黒の淵へ落ちそうなの世のものとは思えない憎悪の気。
何かがいる。

そんなはずはない。

発進する時は誰もいなかつた。

何かがいる。

カズユキは身の危険を感じた。

だがスピードは落とれない。

いや・落とせないのだ。

この停ると最悪な何かが起るの予感がある。

家に向かって車は進む。

それでも、気になるカズユキはドライバー越しに除くことを試みた。

ゆっくり視線を動かして。

ドライバーを見る。

やはり予感は的中した。

うしろに。

何かが・・・。

「誰か」が・・・。

いた。

カズユキを乗せた車は勢いよく壁に激突した。

プレゼントのぬいぐるみは血に染まることになった。

つづく

第6回 ハウジ

朝、目が覚めたら9時を回っていた。

時計を確認したハウジは慌てて起き上がった。
完全に遅刻だ。

今日は大学の仲間達で遊びに行くのだが、気になつてゐる憧れの子
も一緒にということで気合が入つていた。
たまたま、紹介されて、一目惚れに近いくらいの衝撃だった。
すぐに電話交換して、何度か電話し、誘つたりもした。
ガードはかたく、一人きりというわけにはいかなかつた。
それで、こんかいのグループで遊びにいくこととなつた。

最近付き合い始めた彼女とは早速喧嘩したばかりだ。
浮氣なんてしていないのに、浮氣したと問い合わせられて頭にきたの
だ。

「まだ」「何もしていない。
向こうも「まだ」その気はない。
その後のことはわからないが・・・。

そんなうるさい女のことはどうでもいい。

この日のために用意した服を出すためにクローゼットに近づいた。
事前にさりげなく聞いていた好みからチヨイスした服。
今日でなんらかの返事をもらつよう動いてみる。
その結果良し悪しで今の彼女と別れるかどうか考えよ。

瞬間。

背筋が凍るほど寒が走る。

奥に「何か」いる。

「誰か」いる。

クローゼットの中に。

「誰か」が。

だが自分以外に誰がいるというのか。
今今までそんな気配もなかつたのだ。

コウジは構わず開けた。

不思議と驚きはなかつた。
恐怖もなかつた。

むしろ幸福感さえある。

このままこの感覚がずっと続けばいいと思つた。
コウジは実現することのない幸福感をいつまでも感じていた。

つづく。

第7回 ハルキ

今日もまた殴られた。
金を持つこなかったからだ。

バイトもしない学生が、どうやって毎週1万円もの大金を作ることが出来るというのだ。

ハルキは怒りに震えながらもどうすることも出来ない力に苛立ちを覚えていた。

元々が気弱に見える分、損をしていた。

不良どもに目を付けられるまではさほど時間はかからなかった。
いきなり呼びつけられて、金を要求された。

断つたら殴られた。

親には部活での傷だと言い訳した。

部活などやってはいけない。

先生には階段で転んだと説明した。

明らかに殴られたものだとわかるのに、先生は当然のように納得した。

こんな学校なんで、もう嫌だ。
やめたい。

しかし、それよりも今は金だ。

足取り重く、ハルキは家路につく。

その間、最速の電話が鳴る。

電源を切ると、また殴られる。

無視すると、それでも殴られる。

一緒なら、電源を切ればいい。

ハルキは切った。

親に頼み込むか、それとも盗むか、ハルキは自分の部屋で考え込んでいた時、ドアをノックする音。

母親だ。

ウザイ。

子離れできない親。

心配したように、呼びかける。

お前に俺の何がわかるってんだ。
話しかけるな。

いい加減にして欲しい。

だがハルキの頭の中では金のこともあってか、二三は冷たくすることは出来ないと打算が働いた。

仕方なしに気のない返事をしてハルキはドアを開けた。

目の前に・・・・・「誰か」がいた。

良いことがある。

これからもうお金渡すことはない。

悪いことがある。

これから1円たりともハルキはお金見ることはない。

一生・・・。

永遠に・・・。

つづく。

第8回 刑事

刑事は机の上に投げてある書類を手に取り溜息をついた。

煙草に火をつける。

煙を吐き捨てるように吐いた。

書類に目をやる。

もう何度も読んだ書類だ。

再度手に取り、パラパラとページを捲る。

ウンザリしていた。

再度書類を投げた。

今度は手をのばしても取れないくらい遠くへ。

ありえない事件。

不可解な事件。

事故なのか、殺人なのかも見当がついていない。

7人の男女が時間は違えどほぼ口を空けずに死んでいったのだ。
それも調べてみれば・どこかで誰かが必ず繋がっている。

学校の同級生同士であるハルキとリュウジ。

ハルキは家で、リュウジは学校帰りの道で死んでいた。

彼らが通っている学校の教師とその娘。

キヨミとカズユキだ。

キヨミは家の心臓発作。

カズユキは帰る途中の交通事故。

その学校の卒業生のコウジ。

コウジの恋人ミカと昔の恋人ユキエ。
それぞれ、家で、そして外で死んだ。

事件性は全くない。

それもそのはず、傷ひとつないのだ。

交通事故のカズユキは別として。

しかし。

この死んだ彼らが、全てが細い糸で繋がっているのか。
かといって何かの接点が死んだみんな全てにあるのか。
恐らく答えは「ない」だろう。
顔は知っているかも知れない。
名前も知っているかも知れない。
それだけだ。

それ以外につながるようなものはなにもない。

これは連續殺人なのか。

彼らの繫がりが狙われているのか。

他にも出てくるのか。

予想しようにもあまりにも多い選択肢を刑事は選ぶことなどできる
わけなかった。

つづく

第9回 ムツミ

あまりの突然のことに世界は変わった。

娘が楽しみにしていた誕生日。

お父さんを待ちながら、ウロウロしていた。欲しかったぬいぐるみを持つてくれれる。落ち着きのない動きで騒いでいた。

しかし。

娘が窓から崩れ落ちるように倒れ、息をしていないことに気づくまでは時間がかからなかつた。

パニックに陥つたムツミは夫に電話かけたが繋がらなかつた。車でも運転しているのだろうか。

呼びかけても身体をゆすつても娘は全く反応がない。

それが、既に手遅れだということには気づいていない。

それほど焦りが思考回路を消し去つていた。

病院だ。

ムツミは近くの救急病院に電話しようとした時。

電話が鳴つた。

夫からかもしけない。

だが違つた。

追い討ちをかけるように今度は夫の交通事故死の連絡。

娘と同じ日に。

なんという運命だ。

娘の誕生日という幸せの日に起こった最悪の出来事。

ムツミはもう生きていく気力がなかつた。

いや生きていたくても立ち上がり生活していくだけの力もなかつたのだ。

死にたいと思つた。

今なら強盗か何かに入られても抵抗することなく喜んで殺されるだろつ。

今なら火事になつても喜んで焼け死んでいくだらう。

誰でもいい。

「誰か」

「誰か」

私を夫と娘の所へ連れて行つて欲しい。

そんな時、玄関のチャイムが鳴つた。

その音は、何処かへ行くための出発ベルのようになつた。

フラフラと歩き出した。

玄関へ向けて。

そして。

扉を開けた。

そこには。

「誰か」がいた。

つづく。

第10回 刑事2

刑事は思つ。

そうだ。

考えれば簡単にわかることだつた。

死んだ7人の中で唯一血縁関係なのはオカダカズユキとその娘キヨミだ。

他の人間はそういうた関係はない。

ということは妻のムツミの身にも何かあつて然るべきだろつ。そんな可能性や根拠は、はつきり言つて何もない。

しかし、頼れる情報や僅かな確率はコレしかなかつた。

刑事は素早く車に乗り込んだ。

渋滞に巻き込まれることもなくすんなりオカダ邸に辿り着いた。

家の敷居に入ると、異様な雰囲気に圧倒された。

なにがあつたわけではないのだが、異様な空気を肌で感じた。

チャイムを鳴らす。

・・・・・。

誰も出ない。

もう一度鳴らす。

・・・・・。

出ない。

まさか外出?

こんな時とか？

いやそんなはずはない。

そんな女に見えなかつた。

そんな非常識な女ではないはずだ。

葬式でのあの衰弱ぶりを見れば、あれで何処かに行こうこうう気には絶対になれない。

予想は当たつたのだ。

何かがあつたのだ。

何かに巻き込まれたのだ。

あるいは「誰か」に。

ドアに手をかけると鍵はかかってなかつた。

今このこの物騒な世の中、鍵がかかっていない時点でおかしいではな
いか。

間違いなく事件の予感を感じた刑事は迷うことなくドアを開けた。

ゆつくりと開いていくドアの前には。

この世で一番おぞましい物でも見たかのような醜い表情で。
死んでいるムシの姿があつた。

刑事はヨロヨロと扉にもたれかかつた。

「遅かつた」と一言呟いた。

吐き気を覚え、口に手をやる。

瞬間。

身の危険を感じた。

気づいた時は。

「遅かつた」

第11回 探偵

夜。

古びた街の奥にあるビル。
真つ暗になつていたところに明りがつく。

探偵事務所。

1人の探偵が疲れ果てた顔で帰つてきた。
探偵はイスにもたれながら溜息をついた。

突然依頼されたとはいえ、初めから気が進まなかつた。
この一連の殺人・・事故と呼べばいいのか、一度に7人もの男女が
死に、死んだ親子の妻もまた死に。
更にはその場に居合わせた(?) 捜査担当の刑事も死んだ。
計9人もの死体を出した。

調べれば皆何かの繫がりがあつた。

刑事はどういう繫がりか?

事件担当していたからか?

ならば事件の真相を調べるよう依頼された俺の命も危ないので
?・?と探偵は思つた。

信じたくないが、身体のどこかが告げていた。

「危険だ」と。

「関わつていけない」と。

長年の勘がそう告げていた。

呪い?

そんなものは信じたことない。

ありえないと思つてゐる。

非科学では証明できないことは全く興味がない。
探偵はふんつとイスにもつと深くもたれる。

裏で何かの組織が動いてゐる?

それこそ、突拍子もないことだ。

そんな大きな事になつてゐるとしても。

死んでいつた者達の共通な点がない。

生活も付き合いもバラバラなんだ。

それでも危険という気持ちがどうしても拭いきれない。

かといつて根拠もない危険というだけで止めるわけにはいかない。
仕事はそんなに甘くないのだ。

だがどこから切り崩していけばいいのか。

何から調べていけばいいのか。

今の状況では思いも付かなかつた。

探偵は分厚い資料を手にもう一度徹夜になることを覚悟した。

つづく。

第1-2回 ショウウ

ショウウコが一人で遊んでいる時に、両親から聞かされた。
隣の家のキヨミが亡くなつた。

まだ幼いショウウコには「死」というものを理解できていなかつた。
キヨミが遠くへ行つたといつことしかショウウコの親も説明できなかつた。

仲良しだつたキヨミちゃんが突然いなくなつた。
なんで?

どうして?

わからないよ。

パパ、ママ、どうして泣いているの?

キヨミちゃんのパパとママも優しかつたよ。

よく家に遊びにいったよ。

キヨミちゃんの家には色々な玩具があつたよ。

いつもいつも遊んだよ。

キヨミちゃんと遊ぶのが楽しかつたよ。

ショウウコはキヨミの家に行くのがいつも楽しみだつた。

もう行けないの?

何があつたの?

ねえ、誰か教えてよ。

どうしてみんな黒いお洋服を着ているの?

どうして皿の前にキヨミちゃんの写真があるの?
どうして?

キヨミちゃんは?

どうして?

誰か教えてよ。

ねえ。

だれか。

だれか教えてよ。

「誰か」

ショウコは誰かを渴望する。

キヨミの遺影の前でショウコはお願いした。

すると。

ショウコの皿の前に「誰か」が現われた。

あれ?

あなたはだあれ?

それはキヨミちゃんの玩具だよ。

いいの?

キヨミちゃんいないけど遊んでいいの?

あれ?

目の前が真っ暗だ。

見えないよ。

どうしたの?

どうじしたの?

パパ?

ママ?

どこにいるの?

あたし・・お迎えを待つていいの?

じゃあ待つているよ。

早く来てね。

パパ。

ママ。

そのままシラカバは永遠に遊びはじめた。

つづく。

第1-3回 ナツヒコ

静寂。

ナツヒコは誰もいない職員室でテストを採点していた。
だが集中できない。
できるわけない。

不可解だ。

理解できない。

オカダ先生が突然の交通事故死。

その奥さんと娘さんも原因不明の死亡。

発表ではいずれも心臓発作ということになつていて、
更に生徒2人もその学校を卒業した先輩も死んだのだ。
こんな身近でこんなことが起こるなんて。

何かがある。

普通では解明できない・・何かがあるんだ。

ナツヒコは身震いをした。

気づくともう残っているのは自分だけだ。

気味が悪くなり、今日はここまでにして帰ろうと思つた。

夜の学校はどうも不気味だ。

準備をしている時。

後ろで物音が聞こえた。

ナツヒコは驚いて硬直した。

よくよく音のした方を見ると

採点していたテスト用紙の上に投げてあつた赤ペンが転がつたのだ。
転がつただけだ・・・。

そんなこと今まであつたか？

ペンが転がるほど傾いていたか？

それよりも、あのペンは丸くはない。

そもそも転がるはずがないのだ。

？・・・・・。

いや・・・・・。

そうだ・・。

転がつたのではない。

動いたのだ。

独りで動いていたのだ。

まるでペンに命が吹き込まれたよつ。

ナツヒコはペンの動いているのを何も考えずに見ていた。

そして「ひいつ」と悲鳴を上げた。

意識は遠のき、その場に倒れこんだ。

赤ペンが書いた「殺す」という文字をナツヒコは見るのはなかつた。

つづく

第14回 エリ

タキガワナツヒコ先生が死んだ。
ざまあみろだ。

この私の告白を断つたからだ。

家の中、学校からまわってきた連絡網を聞いた。
エリは一人で笑みを浮かべる。

煙草に火を点け、ふうっと煙を出した。

何が教師と生徒だ。

何がもつと自分を大事にしろだ。

最初に遊び半分で手を出してきたのは向こうの方だ。

言い寄ってきて、半ば無理矢理私を抱いた。

何度も、何度も、その内私もまんざらでもなくなってきた。
タキガワに対しての気持ちもはつきりわかつってきた。

だがそれをこつちが本気になつたらすぐに手の平を返すのか。
断るどころか、別れ話。

もう会うのはよそう・・だと?

勝手すぎるじやないか。

ならば初めから手を出さなければいい。

私以外にも同じような生徒を抱えていたくせに。

もしかするとその内の「誰か」がタキガワを殺したのかもしれない。

礼を言いたい。

よくぞ殺してくれた。

だが私には関係のないことだ。

勝手に捕まればいい。

先日死んだハルキとリュウジも関係ないことだ。
オカダ先生も関係ないことだ。

周りは何か不思議なことが起こってるようなことを言つてる。
確かにおかしいようなことが起こつていいのはわかる。

同じ学校内で同時期に4人も死人が出るなんて。

だが、偶然だ。

そうに決まつてる。

そんな映画みたいな話あつてたまるか。

エリは煙草の火を消し、何事もなかつたように学校へ向かつた。

つづく

オカダカズユキの同僚であるタキガワナツヒコが職員室で死んでいたそうだ。

テストの採点中だった時の心臓発作。

そこまで苦しんだわけではないらしく、赤ペンなどが転がっていただけで、他の物は酷く散らばっていなかつた。

格闘の跡もない。

明らかに事故だ。

誰がみてもテストの採点中に突然苦しみだして、一人だつたため助けも呼べず、そのまま亡くなつたようにか見えない。

本来ならば、事故だ。

事故としてとられるだらう。

だが探偵はそうは思わなかつた。

死んだタキガワ先生はオカダ先生と同じ学校だつたのだ。
そして、2人の生徒も同じ学校。

事故ではない。

これは今までの延長だ。

奇妙な出来事。

どういうことなんだ。

連續殺人にしては不規則過ぎる。

親子を狙つて、同級生、恋人、統一性が全くなない。

探偵は学校へと車を走らせた。

とりあえず現場へ向かおう。

今日もさすがに授業はないだらう。

校長先生のお話で休校だ。

喜びのせいか生徒の足取りも軽い。

家に帰つてから、遊びのことでも考へてゐるのだろう。

自分たちの学校での連續の死。

もしかしたら、今度は自分かも・・という発想はないのか。
なぜ笑顔で登校できるのだ。

ふとある女子生徒が探偵の目にとまつた。

色氣のある茶髪の女。

どことなく社会に突つ張つてゐるような態度が遠くからでも見て取
れる。

女子生徒は突然しゃがみこんだ。
何の前触れもなく。

探偵には倒れるように見えた。

探偵は思わず車から飛び降りて女子生徒へ駆け寄つた。

つづく。

第16回 エリ2

エリは学校へ向かっていた。

今日も休校になる。

嬉しい。

こんな事件が起こって良かつたなあ。
だって授業受けなくていいのだから。

今日は何処へ遊びに行こうか。

買い物でも行こうか。

カラオケでも行こうか。

それともナンパされるために街でウロウロしてこうか。

そう思っていたエリの急に足が止まる。

眩がした。

クラッと身体が歪む。

体勢を立て直したかと思うと。

今度はふいに目の前が真っ暗になつたのだ。

何が起こったのかわからない。

目をこするが暗い。

何度も確認をする。

間違いない。

闇だ。

目を開けている。

閉じてはいけない。

目を開けていても関わらず。

目の前が暗闇で包まれているのだ。

不安になつてエリはしゃがみこんだ。

目は開いている。

間違いない。

暗闇だ。

真つ暗だ。

ザワザワと他の生徒達の声がする。
話しかけたりする者はいない。

エリの身体を気遣う者もない。

「おい大丈夫か？」

突然オヤジの声がする。

身体を激しく揺すられる。

クソが。

私のこの綺麗な身体を汚い手で触るな。
てめーみたいな、オヤジが触つていいわけないだろう。

エリはそう思いながら、その手を振り払おうとしたが、うまくいかない。

頭の中はパニックになつていた。

「おい。おい。」

構わぬオヤジは揺する。

もう触るな。

どこかに行け。

エリは更に跳ね除けようとしたがそのまま身体は大きく回転して倒された。

頭に衝撃が走る。

目の前が、一瞬明るくなつたが、後に残つたのは永遠の闇だった。

つづく

第17回 シンジ

家の中。

部屋の中。

布団の中。

シンジはガタガタと震えていた。

ここ2・3日学校に行っていない。

無断欠席している。

突然。

あまりにも突然な出来事だつた。

同級生が2人もいきなり死んだ。

2人はいわゆるいじめっ子・いじめられっ子の関係だつた。

何がどうなつてこんなことになるのか。

どちらか1人であれば納得がいく。

いじめていた奴が無茶したか、いじめられていた奴が無茶したかのどちらかだ。

事件性がはつきりする。

だがどちらでもない。

2人が死んだのだ。

それもほぼ同時に。

わからない。

誰が動いたのか。

どうなつたのかわからない。

シンジは恐かつた。
なぜなら。

シンジも一緒に金を脅し取つてた仲間だつたからだ。
この死んだ2人の関係に関与していたのだ。

シンジも部類で言えば、いじめっ子の部類だつた。

次は自分の番じやないのか？

自分の身になにか危険が降りかかるのではないか？

誰が学校なんかに行くものか。

シンジが布団に潜り込んでいる間。

キイ・・・。

ドアが開く音がした。

身体が恐怖で動かなくなる。

ミシ・・ミシ・・・。

近づく音。

まさか。

まさか！

「シンジ・・？」

心配そうな女の声が聞こえた。

母親だ。

シンジは安堵した。

脅かせやがつて！

怒りがわいてくる。

「うつせ～よ！」

シンジは睨みを効かせようと布団から飛び出た。

だが。

目の前にいたのは母親ではなかった。

つづく

私はゆっくりと歩いていた。

行く先は決まっている。

進む先は決まっている。

できることなら行きたくない学校へと向かつていった。

また皆のいじめの対象にされるのが嫌でたまらなかつた。

途中才力ダ先生の家を通り過ぎる。

丁度、家を出て行こうとしてるところだつた。

いつも仲の良い家族。

小さい女の子と美人の奥さん。

才力ダ先生は幸せそうな顔してゐる。

羨ましい。

その幸せが少しでも私にあれば。

学校での才力ダ先生の評判は悪くない。

生徒のことを優先に考える良い先生と知られている。

確かにそうだ。

確かに「皆」にはそうだ。

でも私と目が合うと才力ダは何も言わず無視する。

それもそのはずだ。

私の身体をキズモノのしたのは才力ダ本人だ。

自分から襲つてきていて。

自分が勝手に私を欲しがつて。

自分が勝手に起こした行動なのに。

何故私を無視するのか。

私が悪いのか。

私が何をした。

私が誰かに喋つたか？

何も私から誘つていない。

初めはオカダからの行動なんだ。
たまたま一人きりになつた時があつた。

遅い時間。

いじめに遭つてていた私の相談に乗つてくれていたのだ。
その時は。

その時までは。

生徒のこと考へてくれる先生だと思つていた。
でも、目の色が変わつたオカダは突然私に襲い掛かつた。
それから何度も私は犯された。

何度も。

ことあるごとに相談に乗るフリをして。

遅い時間まで残されて。

何度も。

逆らうことはできなかつた。

そんな屈辱が何日か続いた時。

教室でいつもよう無理矢理犯されているのを同じ教師のタキガワ
先生に見られた。

つづく。

タキガワ先生は優しかった。

そのことを見たといつて学校側にも何も言わなかつた。

オカダにも何も言及しなかつた。

オカダはその件以来、私には手を出すことはなくなつた。

今思えば。

そのことをいつかどこかで誰かに言われることを恐れて私を無視していたのだろうか。

タキガワ先生は何も詳しく聞かなかつた。

なにより私のことを、私の気持ちを最初に考えてくれたのだ。

傷ついた私を守ろうとしてくれていた。

私の心タキガワ先生が入り込んできた。

タキガワ先生のことしか頭にないくらい想いつようになつていった。

タキガワ先生と本気で相談しあつて、色々と解決策の話をしました。

私とタキガワ先生が愛し合う関係になるまで長い時は必要としなかつた。

幸せな日々が続く。

この人と一生、一緒にいたいと心の底から思つた。

だがちょうど学校内で二人いるところを同級生のリュウジに見られた。

リュウジは本当に腐つた奴でそれをネタに私を脅してきた。
学校に告げ口すると。

それが嫌ならば・・・・・。

結局・・。

金とあわよくば私の身体が欲しいのだろう。

タキガワ先生には言わずに私の方に言つててきたのはそういうことだ。
世の中自分のことしか考えない奴が多すぎる。

私はリュウジの先輩であるコウジさんに相談を持ちかけた。

運良くコウジさんは顔見知りだつた。

コウジさんの言つことなら、リュウジの馬鹿も仕方ないと思つだう。
だが。

男という生き物は。

タキガワ先生以外の男は。
ケダモノだと確信した。

コウジさんもただのケダモノだった。

つづく

「コウジも私の身体が目当てだつたのだ。
私自身はそうは思つてないが。

私の容姿はかなり魅力があるみたいだ。
その容姿と元々暗い性格なのが災いして、いじめを受けるところになつた。

特に女子のいじめは酷いものであつた。

リュウジの件をなんとかするからヤラセないとコウジは言った。
断つたが、コウジは引き下がらない。
しつこすぎる。

逆にバラすと脅された。

なんて奴だ。

頼つてきた弱い女を反対に脅すなんて。
仕方なしに。

抱かせてやつた。

とりあえずリュウジのことはなんとかなるかもしけない。
コウジとはこれからも少し続くのだろう。
そう思うと憂鬱になつてきた。

私は必死だつたのだ。

タキガワ先生との仲を終わりにしたくない。
バラされたくない。

タキガワ先生に迷惑をかけたくない。
私は先生の傍にずっといたいのだ。
永遠にいたいのだ。

卒業式に告白しよう。

きっと受け入れてくれる。
いや・卒業式まで待てない。
今だ。

今が大事なんだ。

私は覚悟を決め、タキガワ先生のところへ行こうと足を速めた。
嫌なことは忘れない。

今、告白しよう。

きっと受け入れてくれる。

そしたら学校なんて行かなくていい。

私が先生の面倒を見てあげるのだ。

掃除も。

料理も。

なんでも私がしてあげるんだ。

タキガワ先生の胸の中で幸せを感じたい。

私は迷わず先生の家への道を足取り軽く歩く。

タキガワ先生の家に行く途中にある交差点は信号が見えにくいため、
よく事故を起こす場所で有名な交差点だった。

私は横断歩道を渡る。

私の中では信号は青だった。

私の心は青だった。

しかし。

心躍る私の瞳に赤信号は見えなかつた。

つづく

どがん。

全身が揺れた。

実際そんな擬音が鳴ったかといつのは疑問に残るが。

私の身体が宙に浮いた。

ふわっと。

気持ちのいい浮遊感を感じる。

宙に浮いた私の身体は。

そのまま地面に吊りつけられるよう逆に頭から落ちた。
ぐちや。

変な音が響く。

同時にジワジワと痛みが出てきた。

車に撥ねられたみたいだ。

意識はしつかりある。

慌てて飛び出した運転手の呼びかけにも反応できた。

だが身体が動かない。

感覚的に私は悟った。

このまま死んでいくのだろうと。

これが死ぬということなのだろうと。

結果的にそれは正しい分析だった。

意識がどんどんなくなっていく。

私は眠るように目を閉じた。

暗い・・・。

闇・・・。

暗闇・・・。

タキガワ先生は悲しんでくれるだろうか・・・。

私の人生なんだつたのだろうか。
いじめられ、弄ばれて。

ようやく安らぐ人を見つけたと思ったのに。

許せない。

許すことは出来ない。

憎しみが増加する。

私の意識はもうこの世には存在していなかつた。
私は死んだ。

闇に包まれ・・・・・・。

どれだけの時が経つたのだろうか。

あるいは一瞬の時だつたのだろうか。

気がつけば・・・・・・。

オカダ先生の家の前にいた。
幸せな家庭。

憎い。

窓から女の子が覗いてる。

オカダの娘だ。

幸せな家族。

女の子は私を見つけた。
女の子は私を見ている。

じつと。

憎しみが増加する。

何を見ている！

私は女の子を睨んだ。

女の子は驚きもせずに倒れた。

つづく。

憎しみが増加する。

この世の憎しみ。

まわりの憎しみ。

自分を死へと導かせた憎しみ。

気がついたら車の後部座席にいた。
目の前はオカダが座つて運転していた。

傍には大きなヌイグルミがある。
子供の物か。

何かのプレゼントか。

誕生日か。

いい気なものだ。

私を弄んで。

犯して。

自分の性欲だけを満たして。

後は知らないということか。

私が死んだことには何とも思わず。
家庭のことだけを考えているのか。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

一瞬。

後ろの気配を感じたのだろう。
ミラーからオカダが後部差席を窺つた。

何を見ている！

私はミラー越しに睨んだ。

オカダの意識が遠のき、そのまま車が激突し、炎上した。

私はどこへいくともわからず。

憎い気持ちがある場所へ。

憎い人がいる場所へ。

気がついたら暗い夜道に立っていた。

前方に女が歩いている確か「ウジの女だ。

コウジの家で犯されている時に写真が立ててあるのを見た。

この女さえちゃんとしていたら。

私は・・・・・。

こんなことにならなかつた。

他の女に手を出すほど、満足していないことだ。

この女さえ・・・・・・。

憎い。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

私は女の後を付いていった。

私の気配に気づいたのだろう。

女の足が早まる。

途中で足が止まる。

意を決したように女が振り返った。

目には強い意志を感じられたが、それはすぐ絶望に変わった。

何を見ている！

私は睨んだ。

そして襲い掛かった。

つ
い
く

気がついたらどこかの中にいた。
タンスかクローゼットの中だ。

何者かがゆっくり近づいて、ためらいがいちに開けた。
コウジだった。

意外な表情を見せた。

なんでいるんだ?と言わんばかりの。
信じられないという顔

こんな奴に犯されたなんて。

こんな間抜けな顔の奴に襲われたなんて。
こんな奴に私の全てを見られたなんて。
あの時の邪悪な笑顔が忘れられない。
あの時の卑猥な言葉が頭から離れない。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

私はコウジの顔に触れた。
魂を抜き取った。

すうう・・とコウジの口から何かが出た。
これが魂なのだろう。

コウジは恍惚な顔をして。

更に邪悪な笑顔のまま崩れ落ちた。

気がついたらお風呂場の中だった。

何処だ?

女性が住んでいるような感じがする。

いきなりドアが開け放たれた。

女の驚く顔。

私はなりふり構わず襲い掛かった。

相手の女も声を出す暇もなかつた。

気がついたらリュウジの声が聞こえてきた。

携帯で話しているようだ。

私はそのまま呪いの言葉を放ち、襲い掛かった。

携帯電話が音を立てて地面に落ちた。

気がついたら再びオカダの家の前に立つていた。

オカダの管理をちゃんとしていなかつた妻に対しても憎しみが増加した。

玄関を開けた妻に襲い掛かった。

しばらくすると警察の男が一人慌ててやつてきた。

私のときにもつとよく調べれば、何かわかつたのではないか。

私は襲い掛かつた。

全部。

全部だ。

全部に私は襲い掛かつた。

つづく

ショックだった。

こんなショックなことはない。

タキガワ先生はエリという女子生徒とも関係があった。

それだけではない。

誰とでも関係を持っていたのだ。

私が特別ではなかった。

私も結局そういう扱いだったのだ。

都合の良い女の一人だった。

一番じゃなかつた。

悲しかつた。

怒りも芽生えた。

憎い。

憎しみが増加する。

全てが憎い。

殺してやる。

殺してやる。

教室でタキガワに襲い掛かつた。

エリにも襲い掛かつた。

私の後になって。

調子に乗っている女だった。

この女がタキガワを誘惑したのだ。
きつとそつだ。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

殺してやる。

エリに襲い掛かった。

リュウジが私のことを誰かに話して居るかも知れない。

私の名誉に関わる。

リュウジの知り合いは全て殺す。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

コウジも誰かに話して居るかも知れない。

私の名誉に関わる。

コウジの知り合いは全て殺す。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

オカダの関係して居る人間もだ。

真に悪なのはオカダなのだ。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

それを邪魔する警察もだ。
調べるべきは私ではない。

憎い。
憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。
殺してやる。

全て。
全てだ。

関わる奴を全て殺してやる。
全員殺してやる。

つづく。

第25回 探偵3

なんてことだ。

見落としがあった。

探偵はいきなり思いついた。

7人もの突然死とそれに続く死。

もはやそれは事件と呼ぶにふさわしい死。

そこだけに集中していた。

調べる時も死んだ人間だけを調べていた。

極めて細い糸で繋がっている程度で、何も確信することはでなかつた。

だが、誰が、決めた？

この7人の事件が最初だと誰が決めたんだ？

この7人から全てが始まったと誰が決めたんだ？

もしかしたら。

そう、もしかしたら。

その前にも同じようなことがあったかもしれないではないか。

同じような理解不能な死があつたのでは。

その前を調べることを探偵は怠つていた。

自分自身に舌打ちする。

自分に喝を入れて、探偵は調べ直した。

7人の事件から2・3ヶ月前。

すると。

出てきた。

女子生徒が一人、交通事故死していたことがわかつた。
赤信号の飛び出し。

信号確認をしなかつたための事故。

自殺でもない、完全なる事故である。

本当に事故か？

本当の始まりはこの女子生徒の死からではないのか？

探偵は長年の直感で思つた。

更に遡つたがその前には何もない。

事故も何もこの辺りでは起こつてないのだ。

ここに何かがある。

当時は事故として簡単に処理されたのだろうが、今となつてはそう
もいかない。

この死にも何かある。

探偵は死んだ女子生徒のことを調べようと決めた。
たとえそれが危険なことでも。

つづく。

静まりかえつた暗い部屋。

あの子がいなくなつて。

もう3ヶ月経つ。

もつそんなに経つの？

まだ線香の香りが部屋の中に充満している。

この匂いも心地よいものになつてきた。

慣れることはこういうことだ。

でも今は身体が動かない。

動かそうともしない。

立ち上がる気力もない。

あの子はいないの？

もうこの世にいないの？

いなくなつたの？

私の前から・・・。

いえ。

いいえ。

そんなことはない。

そんな子じゃないわ。

いる。

いるわ。

気配を感じる。

あの子を感じる。

娘を感じる。

いる。

いるわ。

あの子は間違いない。間違いなくどこかにいる。

そうよ。

あの子は生きている。

死んでなんかいるものか。

死んでるわけない。

私の子がそんな簡単に。

あっけなく死ぬわけない。

この度の事件・事故。

最近ニュースを賑わしている不可解な死。

全てに娘が関わっている。

絶対に関わっている。

感じるのだ。

わかるのだ。

あの子を感じる。

あの子の存在を。

もつと感じてみたい。

だからこそ探偵に調査を依頼した。

その調査報告書を読むだけであの子を感じることができる。

早く情報を持つてこないだろ? うか。

早くして欲しい。

早く来て欲しい。

早く。

早く。

早く。

早く。

あの子が死ぬなんておかしい。

信じられない。

きっと何かの間違いだ。

娘は悪者に巻き込まれたんだ。

意図的に狙われたんだ。

娘は殺された。

いえ・死んでない。

死ぬわけがない。

でも、殺された。

犯人がどこかにいる。

いえ・娘は生きている。

つづく。

でも、

いえ・

馬鹿な。

そんな。

なんてことだ。

こんなことが。

死んだ女子生徒は。

俺の依頼人の娘だった。

どういうことだ?

なぜ?

確かに依頼を受けた時には若干の怪しさを感じたが。
暗いのは元々のものかもしれないが。

闇の世界へ魂が向かっているようなそんな雰囲気を感じた。

まさか。

自分の娘が事故で死んでいたなんて。
だがおかしい。

普通ならばその事故を調べるよつに依頼するものだらう。
それが全然関係ない調査。

今まで死んだ、7人の調査なのだ。

明らかにおかしい。

気でも狂っていたのか。

何がどうなつてているのか。

それとも、俺がこの事実に辿り着くことを見越していたのか。

ゾクッ。

探偵の背後にかつてない寒気が走る。
思わず振り返った。

そこには一人の俯いた女が立っていた。

視線だけはじつと見つめて。

探偵だけを見つめて。

その視線が外れることはなかつた。
まるで獲物を狙う目。

憎しみに満ちた目。

人を殺した目。

恨みの目。

全ての者を殺そうとする目。

探偵はよく見る。

はつ・・と。

驚愕する。

この女は。

交通事故で死んだ女子生徒だつ！

あの依頼者の娘だ！

しかし・・ありえない。

この世にいることはありえない。

死んだんだ。

死んだのだ。

今、この場に、いることが、ありえない。
ところとま。

ところどころ

つまり。

つまり！

この女は！
この女が！

今までの・・・・元凶？

つづく。

コンコンと嗅ぎ回っていたのはここにつだ。

このオヤジだ。

何を調べている。

私のことか。

私の過去か。

私の知られたくない昔のことか。

私が誰に犯され、誰に騙され、そして、どんなに惨めに死んでいったことを調べているのかつ！

調べてなんになる。

何がわかる。

何かできる。

くつ・・ふつ・・。

くふふふ。

うふふ。

私を一目みて理解したようね。

私が何者なのか。

どうしてここにいるのか。

自分に何をする気なのか。

あの怯えた顔。

恐怖の顔。

今にも逃げ出したい顔。

少しずつ、足が後ろに下がつていってい。

でももう遅い。

逃がしはしない。

勝手に私のことを調べやがつて。

憎い。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

殺してやる。

殺してやる。

・・・。

何を言つてる?

私のお母さんに頼まれた?

くくく・・うふふ。

あはははは。

それがどうした!

私は襲い掛かつた。

オヤジは恐怖に引きつった顔を浮かべて倒れた。

息苦しいのか、何度も胸を掻き鳴りながらバタバタと暴れている。
まるで虫みたい。

くふつ・・くふふふ。

ぴくぴく痙攣をしていたが、やがてそれもおさまり、静かになった。
死んだ。

魂は闇へと向かつたのだ。

ざまあみろだ。

それにしても・あのババア。

私のこと調べさせてなんになる。

ふざけやがつて。

憎い。

憎い。

憎しみが増加する。

殺してやる。

殺してやる。

殺してやる。

今後も元気なままでいたい。

つづく。

ああ・・。

感じる。

くるわ。

あの子がくる。

あたしに会いにくる。

やつぱり生きてた。

生きていると思つてた。

あたしの思つた通りだ。

死ぬわけがない。

あの子が死ぬわけがない。

どこにいるの？

お母さんはここよ。

女手一つで育ててきた。

たつた一人の可愛い子。

早く会いたい。

あの探偵さんがきっと見つけてくれたんだ。

良かつた。

高いお金を払つただけあるわ。

早く。

早く。

早く。

会いたい。

どこにいるの？

台所？

どこにいるの？

居間？

どこにいるの？

玄関？

どこにいるの？

もしかしてお風呂？

どこにいるの？

もしかしてトイレ？

どこにいるの？

ああ・そうか。

自分のお部屋ね。

ああ、出でりつしゃい。

お母さんよ。

いた・。

お母さんよ。

よく・よく生きててくれてたわね・・・・。

お母さんよ。

何怒つてこるの？

そんなに怒らないで。

もう、うるさく言わないわ。

生きていってくれただけで。

お母さん幸せよ。

もつずつと離れないわ。

ずっと一緒に。

どこが静かなところで暮らしましょ。

こんな場所からば早くいなくなりましょ。

あなたの好きな場所でいいわよ。

ねえ、決めて。

どこにいくの？

あの暗い道の先はどう？

奥の奥の闇はどう？

永遠にずっと・・・。

ずっと・・・。

ずっと一緒に。

早く行きましょう。

私を早くあの闇へ連れていって・・・。

つづく

次回最終回。

最終回 カナコ

エリが死んだ。

どうやら心臓発作だつたらしい。
学校に向かう途中のことだつた。
そんな身体の弱い子だつたか？

最近相次いでこんなことが起きている。

気にはないけど。

自分は大丈夫だ。

カナコは思った。

エリが死んだ。

良かつた。

死んでくれてラッキーだ。
ウザイ奴が死んでくれた。

これでアキヒコは私の物だ。

私がエリなんかに負けるはずはない。

あの子はタキガワ先生とも遊んでいたのだ。
それだけではない。

ほとんどの男と関係を持っていた。

そんな女にアキヒコもよく付き合っていたものだ。

確かに可愛いかもしれないが、あんなヤリマンな女のどこがいいのか。

カナコはアキヒコの家に向かっていた。
これで今日から私がNO・1だ。

しばらく進むと……。

目の前に誰かが立っている。

「誰」だ?

女・・。

女の子・・・?

カナコはゆうくじと通り過ぎようとした。

近づくにつれ、どこかでみたことがあるよ^ウうに思えた。

同じ学校の生徒だったよ^ウうな。

女の目が、かつと見開いた時、カナコはそれが「誰」だかわかつた。

「あつ」

・・と氣付いた時には、もう「」の世の人間ではなくなっていた。

「闇」 完

皆さん。
初めまして。

この度は小説、読んで頂きありがとうございました。
いかがだったでしょうか。

終わり方もあるて、ああいう終わり方にしました。
救いのないような終わりです。

毎日仕事のことなどで、「救われたい」とこつ思いから書き始めた
のですが。

結果的には「救いのない」結末でした。
ああ・やつぱりって感じです。

ホラー系でモチーフは「呪怨」です。

そのままじゃないか！という声を厳しく受け止めますけど。
30回もよく書いたなど我ながら思いました。
まだまだ未熟者ですけど。

頑張ってこれからも書いてこきますのよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7784a/>

閻

2010年10月12日04時02分発行